秋田病理組織細胞診研究センター

がん診断、速く明快に

増える検査受注

秋田市に本社移転　新分野進出も視野

がんの診断や検診に必要な検査を手掛ける株式会社「秋田病理組織細胞診研究センター」（阿部一之助社長）が、県内外の医療機関からの受注を増やしている。今月上旬、本社を由利本荘市から秋田市へ移転。新たな分野への進出も視野に入れている。

顕微鏡とパソコンを使い、医療機関から依頼を受けた検査を行う阿部社長（手前）＝秋田市雄和

病理検査と細胞診の報告書。カラー写真が分かりやすいと好評だ（画像を一部加工しています）

同社は2003年、細胞検査士として由利組合総合病院に勤めていた阿部社長(60)が旧本荘市内で立ち上げた。「患者中心の医療」をモットーに、分かりやすい検査結果報告書を迅速に提供し、医療機関から支持されてきた。

本社の移転は、検査の依頼が増え検体を保管する倉庫が手狭になったため。移転先を医療機関から交通の便がいい秋田市雄和に決め、約1億9千万円を投じて用地取得や新社屋建設を進めていた。

同社は主に、患部の一部を切り取って調べる検査（生検）や手術で採取された細胞組織が良性か悪性かを診断する病理検査と、子宮頸（けい）がんや肺がん検診で検体から異常細胞を見つけ出す細胞診を行っている。細胞検査士の資格を持つ社員のほか、秋田大医学部などからの非常勤病理医が検査・診断を担っている。

阿部社長によると、本県は病理医が常勤している病院が少なく、創業当時は大半の病院が東京などの大手機関に検査を委託していた。だが検体の搬送に時間がかかるため、病院への結果報告まで7～10日は必要だった。

しかし、同社の場合は3～4日で済む。検査を委託した臨床医は結果を迅速に知ることで治療に生かせるほか、患者にとっては結果を待つ間の不安を解消できるメリットがある。

同社は他の検査機関との違いを出すため、報告書に顕微鏡で拡大した検体のカラー写真を添付。阿部社長は「臨床医からは『患者に説明しやすい』と好評だ」と話す。

県内を中心とした東北の病院・診療所の信頼を集め、検査の依頼件数は増え、13年は病理検査が2万1737件、細胞診が4万5018件となり、創業当初の04年に比べ3倍ほどになった。

阿部社長は約10年前、県内医療関係者から「がん死亡率が全国ワーストの秋田には、地元のデータを正確に把握できる検査機関が必要」と後押しされ起業に踏み切ったという。これまで扱った検体は、今後の研究に役立てるために全て倉庫に保管している。

現在、遺伝子検査といった新分野への進出や、県内で細胞検査士を増やすための勉強会も計画中。阿部社長は「地域に根差した検査機関として、県民医療に貢献していきたい」と話している。

（斉藤賢太郎）